

科目名	リスクコミュニケーション特論	担当教員	坪倉正治
科目属性	専門科目 D群	単位数	2単位(面接0.25単位)
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>【概要】</p> <p>日常的に我々が行っている意思決定は、すべからくリスクを伴うが、特に疾病等の情報の格差が大きい分野においては、様々な困難がある。本特論では、福島第一原発事故等を例として、様々な立場のステークホルダーの主張や考え方を理解し、相手の立場に立った情報提供や対話の促進、そして対象者の意思決定を支える姿勢を身につけることを目的とする。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 原発事故後の放射線の健康影響に関する行政と専門家と一般住民のそれぞれの理解や現状認識について説明出来る。 ・ 理解や現状認識の差が生まれた時間的経過、歴史的背景、その認識が固定化されたプロセスを理解し、職業や立場、居住区域など、様々な要素がその差を生み出している現状を福島第一原発事故例に説明できる。 ・ 今後の放射線影響に対する情報提供や、医療者が取るべき態度とその対応策が検討できる。 ・ 放射線災害だけではなく、ワクチンや、投薬など同様の問題が医療や健康の分野で存在することを理解し、それぞれの問題点について概説できる。 <p>【授業計画】</p> <p>1. 福島第一原発事故の健康影響について科学的な立場での帰結を理解する (第1回～第5回相当)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①環境放射線による影響、原爆影響を始めとする一般的な放射線健康影響に関する知見を理解する。 ②福島第一原発事故後における、住民の被ばく量測定結果について理解する。 ③除染や食品コントロールの効果および、それらが被ばく量の低減にどのように効果を持つか理解する。 ④上記データより、今回の原発事故における健康影響が科学的にどのように考えられるかを理解する。 <p>2. 様々な立場のステークホルダーによる考え方や認識の差について理解する (教科書①)(第6回～第10回相当)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①上記の科学的理解に対して、現状の各立場における住民の認識について理解する。 ②年齢別、居住地別、職業別の認識の差について理解し、その差が生まれるバックグラウンド、メディアの役割について学習する。 ③現状に対して我々がなし得るべきこと、解決策について個人の意見を述べる事ができる。 <p>3. 放射線災害だけではなく、ワクチンや、抗がん剤治療など、同様の問題が医療や健康の分野で存在することを理解する。(第11回～第15回相当)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①日本のワクチン摂取の状況、諸外国との差、現状の論争について理解する。 ②抗がん剤治療の一般的な効果および現状の論争について理解する。 ③そのような認識の差が生まれた歴史的経緯や、背景、現状について理解する。 ④物事を多面的・多角的に捉える必要性を学び、他の事象にも応用できる能力を身につける。 			

【評価方法】

スクーリング 25%、レポート 25%、科目修得試験 50%の割合で総合して評価する。

【教科書】

- ①中西準子. (2014). 「原発事故と放射線のリスク学」, 日本評論社 (ISBN-13: 9784535586505)
- ②一ノ瀬正樹. (2013). 「放射線問題に立ち向かう哲学」, 筑摩書房 (ISBN-13: 9784480015648)

【参考図書】

- ①早野龍五. 糸井重里. (2014). 「知ろうとすること。」, 新潮社 (ISBN-13: 9784101183183)
- ②宇野賀津子. (2013). 「低線量放射線を超えて」, 小学館 (ISBN-13: 9784098251766)